

～「子どもだけど大人」「大人だけど子ども」な人たちへのメッセージ～

LITTLE BIG

第70号 2021. 3. 30

発行：福島県立図書館 こどものへや

〒960-8003 福島市森合字西養山1番地

TEL 024-535-3218

<https://www.library.fcs.ed.jp/>

【Pieces - かけらたち - 】 本の中の言葉

当館の職員が読んだ本の中から、素敵な言葉、心に残った言葉を集めました。

みなさんの心にも届いたら、ぜひ手にとって読んでみてください。

◆「子どもの時間は必ずおわるものです。子どもの時間を子どもで過ごさなかった人は、それが心残りで、いつまでも大人になれないのです。それは子どもでもなく、大人でもないこと」

『王の祭り』（小川英子／著 ゴブリン書房 2020.4 p37）

◇比べないと理解できない。これが、人間という生物が持つ脳の限界なのです。しかし、脳が常に正しいわけではありません。忘れてはいけない大切なことは、本当は自然界には序列や優劣はないということなのです。

『はずれ者が進化をつくる 生き物をめぐる個性の秘密』（稲垣栄洋／著 筑摩書房 2020.6 p50）

◆だれにも見られないようにしていたら、だれにも助けてもらえなくなる。それに、ここで実際に何が起きているかということ、世界を知る必要があるのではないだろうか。

『明日をさがす旅 故郷を追われた子どもたち』（アラン・グラッツ／作 さくまゆみこ／訳 福音館書店 2019.11 p262）

◆これまで、なんとかひとりで一日一日をやりすごしてきたのに。でも、いちど口からでたことばは、もとにもどせない。それでいいと思った。子どもだからって、人生が気楽で楽しいなんてことはない。ただおとなが、そうあってほしいと考えているだけだ。

『ソロモンの白いキツネ』（ジャッキー・モリス／著 千葉茂樹／訳 あすなろ書房 2018.10 p34）

◆「まちがったことをしてもね、それだけじゃ、その人のことはわからないと思うの。たいせつなのは、どうつづかうかよ。」

『ほんとうの願いがかなうとき』（バーバラ・オコーナー／著 中野怜奈／訳 偕成社 2019.12 p156）



フェイクニュース

新型コロナウイルス感染症が広まったとき、様々なフェイクニュースが流れました。

世界は、今、テレビやインターネットの他、多様な情報であふれています。その中から自分に必要な情報をきちんと見分け、受け取るにはどうしたらよいでしょうか。

メディアのしくみや特性を知って、情報を得る際の留意点や、ミスリーディングへの対策について、もう一度考えてみませんか？

『その情報、本当ですか？ ネット時代のニュースの読み解き方（岩波ジュニア新書）』（塚田祐之／著 岩波書店 2018.2）

『その情報はどこから？ ネット時代の情報選別力（ちくまプリマー新書）』（猪谷千香／著 筑摩書房 2019.2）

『フェイクニュースがあふれる世界に生きる君たちへ 増補新版』（森達也／著 ミツイパブリッシング 2019.12）

YAの本棚から

中学生や高校生の皆さんや10代の方たちのためのYA(ヤングアダルト)コーナーから、本を紹介します。



お兄さんはたしかにひどいことをした。でもね、ヘンリー、お兄さんはひどい人間だったわけじゃない

『ぼくだけのぶちまけ日記』(スーザン・ニールセン／作 長友恵子／訳 岩波書店 2020.7)

兄が「あのこと」を起こして、新しい都市へ引っ越して父と二人暮らしをすることになったヘンリー。精神科医のセシルから、感じたことや思ったことを書きとめておく「日記つけ」セラピーを提案され、新しい学校で友達になったアルバータとファーリーのこと、やたらとお節介に話しかけてくるご近所さん、家族や自分自身についてなど、こっそり日記をつけるようになります。次第に、頑なに避けてきた兄や、「あのこと」についても日記に触れられるようになりますが、その矢先、「あのこと」を彷彿させるような事件が起きます。



突然ですが問題です。無限の先には何があるでしょう。

『無限の中心で』(まはら三桃／著 講談社 2020.6)

新聞部の助っ人を頼まれたとわは、数学研究部へ数学オリンピックの取材を行うことになりますが、数学研究部では、木曜日のミステリーと呼んでいるちょっとした事件が起きていました。月曜日に部員が解けないで残して帰った難問が、木曜日に解いてそっと置いてあるということです。彼女はその正体がとわのいところで、不登校中の潤だと思い当たります。数研のメンバーの在は、勧誘のため彼の家へ会いに行きますが会えず、彼はメッセージとともに「無限の先には何があるでしょう」という問題を送ります。



魂にはじぶんが主を失ったのがわかるのに、人びとは魂をなくしていることに、往々にして気が付かない

『迷子の魂』

(オルガ・トカルチュク／文 ヨアンナ・コンセホ／絵 小椋彩／訳 岩波書店 2020.11)

ある忙しいビジネスマンは、突然自分のことがわからなくなり、老医師から魂がどこかに置き去りにされたまま、迷子になっていると告げられます。スーツケースの奥で見つけたパスポートから、自分の名前がヤンだと知った彼は、町はずれに小さなコテージを見つけ、そこで幾日も幾週も幾年も彼の魂を待つことします。



そう、人が、「さよなら」というのは、また会いたいと思っているから。

『どこまでも亀』(ジョン・グリーン／作 金原瑞人／訳 岩波書店 2019.4)

近所に住む大富豪・ラッセル氏が逮捕される前に失踪し、10万ドルの懸賞金がかかっているのを知り、アーザは、親友のデイジーから一緒に探そうともちかけられます。アーザはラッセル氏の息子のディヴィスと幼馴染だったからです。しかし、アーザは寄生虫や細菌に感染するかもしれないという強迫性障害を抱えており、また久しぶりに再会したディヴィスの苦悩を知って、うまく調査することができません。